

北九州市立大学法政論集第 50 卷第 1・2 合併号(2022 年 10 月)抜刷

論 説

台湾現代史のなかの日本人

——台湾に長期滞在する日本人への聞き取り調査から——

田 村 慶 子

論 説

台湾現代史のなかの日本人 ——台湾に長期滞在する日本人への 聞き取り調査から——

田 村 慶 子*

はじめに

(1) 研究の目的と意義

台湾の面積は 3 万 6000 平方キロで、九州とほぼ同じである。人口は 2360 万人 (2020 年 2 月) で、その内訳は、台湾では原住民とよばれるポリネシア系の先住民族 (人口の 1.4%) と、16 世紀以降に中国南部からやって来た福建や客家系の移民 (本省人と呼ばれる、人口の 87%)、さらに 1945 年以降に台湾にやって来た大陸中国各地からの移民 (外省人、人口の 10%) などという多様な人々から成っている。福建系の移民が持ち込んだ閩南語が現在の台湾語であり、客家系住民の多くは現在でも客家語を話す。

1945 年 8 月日本は敗戦によって台湾を放棄し、50 年間の長きにわたった日本の植民地統治は終結した。台湾はカイロ宣言によって中華民国に帰属することが決定された。1949 年に中国共産党との国共内戦に敗れて大陸中国を失った蒋介石 (Chiang Kai Shek) 率いる中華民国政府 (国民党政府) は台湾に移転、同年 5 月に台湾全土に戒厳令を敷いて容赦なく反対勢力を弾圧するなど、1980 年代末まで強権主義的統治が行われた。教育言語は外省人の共

* 本学法学部教授

通言語である標準中国語（国語と呼ばれる）になり、台湾語や客家語は公的な場では禁止された。1987年に戒厳令が解除されると1990年代には急激に民主化が進み、2000年3月に民主進歩党（民進党）⁽¹⁾ 主席が直接選挙で総統（大統領）に選出され、国民党支配体制を民主的選挙によって終焉させた。この政権交代によって、台湾の民主化は完成したと評価されている。

日本の台湾研究は、台湾の近現代史とりわけ国民党一党支配とその変容においては貴重な蓄積がある。しかし、日本・台湾関係の研究については、日本の植民地時代（1895年～1945年）の歴史、植民地時代の台湾の政治・経済・社会的変容、戦後の政治・外交関係、台湾が急激な経済発展を遂げる1970年代後半から90年代の台湾経済と日系企業の役割、数は少ないものの、台湾における日本のポップカルチャーの受容に関する研究、がほとんどである。

本研究では、このような日本・台湾間の歴史や外交、経済、文化の関係史ではなく、台湾に長期滞在する日本人の眼から見る日本・台湾交流史、社会史の構築を意図した。台湾在住日本人は2021年で2万4162人、うち永住権保持者は6151人である⁽²⁾。永住権保持者のほとんどは台湾人を配偶者に持ったがゆえに台湾で長期に居住することになった、あるいは日系企業の駐在員として台湾に派遣された後に起業するなどして、台湾で生活することを自ら選択した人々である。このような日本人は、50年間の日本植民地期を生きた台湾人の様々な体験を直接・間接的に聞き、また日本植民地時代に生まれた祖父母や両親を持つ台湾人との交流・接触を経験しながら懸命に働き、生き抜き、自らと家族が生き残っていくための様々な

(1) 民進党は戒厳令下の国民党一党独裁体制下で、政党結成の自由がなかった時代の1986年、国民党に批判的な勢力が結成した台湾政治史上初めての野党である。1989年に政党結成が解禁となって合法化された。

(2) 外務省領事局政策課『2021年在留邦人数統計調査』

<https://view.officeapps.live.com/op/view.aspx?src=https%3A%2F%2Fwww.mofa.go.jp%2Fmofaj%2Ffiles%2F100293778.xlsx&wdOrigin=BROWSELINK>（2022年2月10日参照）

工夫をしたはずである。

このような方々のライフヒストリーを聞き取り、分析することで、政治的・経済的に大きな変動を遂げた台湾に留まり続けた当事者の「個人的な理由」は、当時の社会情勢や日台関係とどのように関連しているのか、台湾人や台湾社会との接触・交流にはどのような工夫や苦労があったのか、台湾人は日本と日本人をどう見ていたのか、さらに在台湾日本人の目から見た日本を理解することができる。

台湾に長期滞在する日本人のライフヒストリーを聞き取り、公的な外交史や交流史と重ねながら分析・考察するという研究は、これまでほとんど行われたことがない。日本と台湾とは国交がないゆえに、このような方々の声に耳を傾け、その貴重な経験を日台の交流や課題解決に活かすという努力が、ほとんどなされてこなかったからである。

本研究は、ほとんど明らかにされていない日本と台湾の「草の根の交流史」として、これまでの日本と台湾の歴史や経済的な関係とは異なる交流史の新たな側面を明らかにする研究として、日本においても台湾においても、きわめて大きな意義を持つと考えられる。

なお、台湾の正式国名は中華民国であり、1971年までは国連の常任理事国であったが、中華人民共和国（中国あるいは大陸中国）の加盟とともに国連を脱退した。日本とは1972年まで正式な国交があったが、中国との国交樹立と同時に日本は中華民国とは国交を断絶した。ただ、その後も台湾という名称で非公式な関係を続け、台湾は日本に実質的な大使館ともいえる駐日台北経済文化処を、日本も台湾に財団法人交流協会を設置している。本稿では、台湾が中華民国として国連の常任理事国であった時期も含めて、台湾という名称で統一する。ただ、国籍に関する記述では台湾国籍と書くと別の問題となりかねないので、中華民国（台湾）国籍とする。

(2) 調査の方法

当初は、台北や台中、高雄など日本人が多く居住する台湾のいくつかの都市を訪問し、対面での聞き取りを実施する予定であったが、残念ながら

新型コロナウイルス感染拡大で訪台は出来なくなった。そこで、「居留問題を考える会」の全面的なご協力をいただき、会員約 480 名にアンケートをメール配信していただいた。アンケート全文は「資料」を参照してほしい。

回答してくださった方は 112 名、そのうち「補足調査のためにメールアドレスと氏名を書いてもいい」と言ってくくださった 62 名のなかから 31 名の方に追加・補足質問をお送りし、23 名の方が応じてくださった。本アンケートに全面的に協力いただいた「居留問題を考える会」の大成権真弓会長と会員の方々に心からお礼申し上げたい。ただ、対面でじっくりとお話を聞けたわけではないので、本研究の目的を十分に達成したとは言えないだろう。新型コロナウイルス感染の収束後に台湾での対面調査を実施し、さらなる研究の深化に取り組んでいきたい。

なお、「居留問題を考える会」とは 1999 年に発足したボランティアグループで、日台国際結婚によって台湾に居住することになった日本人など、台湾で生活する日本人および外国人の居留環境の改善を目的として活動している。具体的な活動は、居留関係の法令、手続きに関する情報の提供、連絡、座談会、陳情、国際結婚に関する調査研究への協力などで、台北、台中、台南、高雄に役員がいる⁽³⁾。当会は、日本と台湾との友好親善関係の増進に貢献したことが高く評価され、2021 年度の外務大臣表彰を受賞した。

第 I 章 回答者のプロフィール

回答してくださった 112 名の性別は、女性 89.2%、男性 10.8%と圧倒的に女性が多かった。これは、「居留問題を考える会」の会員が日台結婚によって台湾に居住することになった日本人女性が多いためである。

回答者の年齢は、30～39 歳が 11.6%、40～49 歳が 42.9%、50～59 歳が 30.4%、60～69 歳が 9.8%、70 歳以上が 5.4%と、きわめて多様な年齢

(3) 居留問題を考える会「会の案内」<https://sites.google.com/site/kyorumondai/home/annai>（2022 年 2 月 10 日参照）

層となった。台湾での居住年数は、20年以上が45%を占め、そのなかには31年以上が12名もいらっしやった。

来台の理由では、「台湾人との結婚」が42%、「観光や留学、自身の仕事で台湾に来た後に台湾人と結婚して長期居住をすることになった」という方が同じく42%であり、日台結婚ゆえに台湾での長期居住を選択された方が圧倒的であった。その他は「日本人夫の台湾転勤に同行した」や「友人・知人がいた」であったが、「(東日本大震災時の)放射能汚染からの避難」という方も1名いらっしやった。

ビザの種類をうかがったところ、以下の表のように半数の方は永久居留ビザを有していらっしやった。なお、台湾滞在ビザは、滞在日数180日以内の短期滞在ビザと180日以上長期滞在ビザ（その中に就業、配偶者、永久居留などがある）に分かれていて、アンケートに答えてくださった方はすべて長期滞在者あるいは国籍を取得した方々であった。

【ビザの種類（説明）と人数】

就業（仕事）	6
配偶者（仕事で赴任した者の家族、日台国際結婚）	27
学生（留学）	1
外僑居留*	1
APRC（永久居留）	65
国籍取得（帰化）	12

- * 外僑居留とは、外国人が台湾に長期滞在するために許可を得ていることを証明する身分証明書で、この方（1名）はいずれかの長期滞在ビザを持っていると考えられる。

II 來台時の台湾に対するイメージと家族の反応

(1) 1970年代～1990年代に來台された方々

1970年代後半から90年代の台湾は、韓国、香港、シンガポールとともに経済発展著しい「アジア4つの龍」として世界の注目を集めていた。しかしこの時期に來台された方の台湾に対するイメージは、「あまり知識がなかった」（1978年来台）、「全然知らなかった」「南国」「発展途上国」「不衛生」（1988年来台）、「奄美諸島と同じかなというくらい」「のんびりしたところ」（1992年来台）、「父がいつもバナナの話をしていたくらい」（1995年来台）、「中国本土と同じようなイメージで、反日だと思っていた」（1998年来台）であり、台湾に対する具体的な知識はほとんどなかった。あるいは、国民党一党支配下での人権弾圧のためか「少し怖いところ」（1999年来台）、「日本人男性が売春旅行に行く対象国」（1989年来台）、「年配の方が遊びに来る国」（1995年来台）というネガティブなイメージをもっていた方もいらっしやった。

これらは、「距離的には近いのに、メディアでほぼ台湾のニュースを耳にすることがなかったので、あまり知らない国でした」（1997年来台）という回答のとおり、当時の日本では、国際社会から孤立し、国民党の一党支配体制下で強権政治が続く台湾に関する情報がほとんど発信されなかったことが主な原因であろう。もっとも、わずかではあるが、「ホームステイの経験があった」（1991年来台）という方もいらっしやった。

このように台湾に関する知識があまりなく、ネガティブなイメージだったとはいえ、2000年以前に來台された方（44名）のうち約60%が「好きな人と結婚し、一緒に生活できるため」あるいは「新天地の生活だから」という理由で「來台は嬉しかった」と回答された。「あまり行きたくなかった」は4名のみで、その理由は「中国語が出来ないから」「義理の親と同居になるから」「知らない土地だから」などという理由であった。その他は「何とも思わなかった」という回答だった。

ご両親は「賛成」「あるいは仕方なく賛成」が圧倒的で、反対された方は

わずか4名だった。反対の理由は「遠いから」「外国人との結婚だから」「駆け落ち同然で来たから」であった。

(2) 2000年以降に來台された方々

2000年以降に來台された方は、急速に民主化した台湾に対する日本人の関心が高まって情報量が格段に増えたためか、「活力のある国」「エネルギーギッシュな国」、さらに「親日」「温かい人が多い」「自由なところ」「食事が美味しい」という具体的で好意的なイメージの回答が目立つようになった。さらに、若者の観光旅行や交換留学、語学留学という人的交流も盛んになったため、「大学時代に交換留学生として来たことがあったので、いいイメージだけでした」（2000年来台）、「元々台湾にはよく旅行に来ていたので、安心して生活できる場所だと思っていた」（2010年来台）、「元々上海に留学しており中華圏で働きたかった」（2011年来台）、「台湾への留学経験があった」（2013年来台）という回答も増えている。

このように2000年以降に來台された方（68名）にとっては、台湾は身近な観光地や留学先になりつつあり、そのために來台が決まった時の気持ちを「嬉しかった」と回答された方が約半数と、2000年以前の方よりも少し減り、「何とも思わなかった」が少し増えた。ご両親に反対された方はわずか3人で、その理由は「（親が）台湾嫌い」「外国人との結婚に反対」「収入や生活面での心配」であった。

Ⅲ 台湾人との接触・交流

(1) 台湾人の対日観

すでに述べたように、日本は50年間台湾を植民地支配した。特に初期（1895年～1915年）は軍事力を使った強圧的な統治政策が台湾住民の激しい抵抗運動を招き、数多くの犠牲者を出した。したがって、この時代を生きた、あるいはこの時代を体験した祖父母や父母を持つ台湾人のなかには、日本人の台湾定住に対して内心ではあまりいい印象を持っていない人

もいらっしやると推定された。

「日本人だからという理由でいやな思いをしたことがありますか？」という質問に対して、「いやな思いをした」が33%であった。具体的には、

- ・30年ほど前に乗ったタクシーの運転手さん（外省人）が、「中国大陸で親族を日本人に殺された」と言って怒鳴り始めた（1988年来台）。
- ・10数年前までは、タクシーに乗った際に、外省人の運転手に第二次世界大戦中の南京虐殺などについて糾弾されたことがあり、何度か怖い思いをした。また、「日本人は台湾人を馬鹿にして、いじめているだろう」というようなことを言われたことがある（1989年来台）。
- ・子どもが小学校低学年の時、「日本鬼子」といじめられた（1990年来台）。
- ・30年前中国語を習った外省人の先生が、「日本は台湾を侵略した、あなたは申し訳ないと思わないのか」と言われた（1991年来台）。
- ・一部の外省人に嫌な態度をされた（1994年来台）。
- ・ある若い人に台湾の歴史の話聞いたとき、「日本人が大嫌いで憎んでいた」と大勢の前で言われた（1994年来台）。
- ・30年ほど前に乗ったタクシーの運転手さん（外省人）が、「中国大陸で親族を日本人に殺された」と言って怒り始めた。かつて日本がしたことを思い、悲しかった（1998年来台）。
- ・（学校で）戦争の勉強をするときは日本人の子どもは何かしら言われる（2003年来台）。
- ・タクシーに乗車したとき、ドライバーに「お前ら日本人は50年間も台湾人を苦しめた」と言われた（2007年来台）。
- ・來台当時、見ず知らずの年配の方から日本人というだけで罵られたことがある（2007年来台）。
- ・子連れで博物館に行ったときに、我々が日本語を話しているのが聞こえたのか、すれ違いざまに臭臭⁽⁴⁾と中国語でいわれた（2010年来台）。

(4) 相手を罵るために使う言葉。

- ・子どもが現地の小学校に通学しており、授業で原住民に対して日本統治時代の日本がおこなった行為を知り、同級生から日本国籍の子どもに対して言語的な攻撃があった（2010 年来台）。
- ・娘が小3の時に現地校の初対面のクラスメート女子から、「日本人は嫌いだ」と言われた（2011 年来台）。

また、「南京大虐殺や日中戦争についてどう思うか、尖閣諸島はどちらの領土だと思うかと質問されて、返答に困った」という回答も複数あったが、これらを含めてほとんどの場合は長い台湾生活の中の1回か2回だけの体験、あるいは10年以上前の体験で、「子どもが小学校低学年の時に日本鬼子といじめられた」と回答してくださった方は、台湾人の夫が学校へ行って担任の先生と話し、その後いじめはなくなり、「(お子さんは)台湾の友だちがたくさんいて台湾が大好き」と追加質問の答えに書いてくださった。

「同級生から日本国籍の子どもに対して言語的な攻撃があった」と回答してくださった方の場合は「2年ほど続いたが、担任の先生が仲介し、両者が話し合って現在はなくなった」とのことだった。また、「小学校の先生が(自分の長男には)日本人の血が流れているとクラスで言ったとき、(長男は)クラスメートにからかわれたが、その後は何もなかった。その先生は国民党の思想教育を受けていたのだと思う。ただ、弟たちが小学校に行く頃には、むしろクラスメートから日本語が出来るのを羨ましがられた」(1983 年来台)、「いろいろな国のハーフの子がいる台北なので、(日本人だからといって)学校での目立ったいじめはなかった」(1998 年来台)という回答もあった。

なお、いやな思いをさせられた相手として外省人が多いのは、中国国民党とともに1945年以降に中国大陆から台湾にやってきた外省人の多くは、大陸での日中戦争や日本の侵略の辛い記憶を持っていたからかもしれない。1989年に來台された方は「1990年代の外省人は威張っていたので、日本人を見ると何か言いたそうにしていた」「外省人も世代によって考え方が異なると思う」と追加質問に回答くださった。

もっとも「いやな思い」には、「コロナが流行していた頃、飲食店で避けられた」「（日本人なので）感染者と疑われた」、「日本人なら～～だろうという固定観念」「台湾人男性が日本女性に対して持つ、AVのイメージ」「帰国するたびに～～を買って来て、と頼まれる」という回答も多数含まれるので、必ずしも「いやな思い」が植民地支配の体験や記憶に起因するものばかりではない。

なお、「いやな思いをしたことがない」は55.4%、「わからない」11.6%であった。

「**仕事や生活で親しい台湾人はいますか**」という質問には、「多くいる」60.7%、「あまりいない」「ほとんどいない」が39.3%だった。滞在が長くても「親しい台湾人がいない」と答えた方も多かった。

「あまりいない」「ほとんどいない」理由は以下であった。

- ・台湾に来てから家を出ることがなく、知り合うきっかけがない。
- ・中国語が苦手なことで、台湾人と出会う機会があまりない。
- ・人とのコミュニケーションが苦手。

台湾人と知り合うきっかけが少ないのは、本アンケートの回答者の多くが日台国際結婚で来台されて家庭に留まり、日本語が流暢な配偶者と家庭内で日本語で話されていることが要因であろう。

ただ、親しい台湾人はあまりいないものの、「**あなたの周囲の台湾人は日本に対して良い感情を持っていると思いますか**」という質問には、「もっている」が94.6%と圧倒的であった。具体的には、

- ・周囲の台湾人が日本食や日本旅行に興味を持っている。
- ・自分が日本人だとわかると、優しくされ、話しかけられる。
- ・日本語や日本文化に興味をもつ台湾人が多い。
- ・日本語に興味を持ち、しゃべれる人が多い。

- ・日本で災害が起こると、自分の日本の家族や親戚のことを心配してくれる。
- ・メディアの日本に対する報道が好意的だと感じる。
- ・日本人をいつもリスペクトしてくれる。
- ・日本人は誠実で真面目だと思っている。
- ・一部の高齢の方は日本語教育を受けたので、日本人に懐かしさと親しみをもって接してくれている。

など数多くの回答を寄せてくださった。

このような回答からも、「日本人だからという理由で、いやな思いをした」ことはあっても、それ以上に台湾人の日本への好意的な思いを嬉しく感じていらっしやることがわかる。ただ、「周りの台湾人は漢族が主ですが、原住民の方々の感情は歴史的に別途に調査する必要があると思う」⁽⁵⁾というご意見もいただいた。

(2) 「外国人として生きる」配慮と工夫

周囲の台湾人の圧倒的多数が日本に親しみを持っているとしても、異国の地で外国人として生きるためには、知恵や工夫が必要なきもある。「仕事や生活で台湾人と接するうえで、気を付けていることはありますか」という質問に対しては、「ある」65.2%、「ない」25.9%、「わからない」8.9%で、「ある」と答えた方は、「政治的な話題、国際的な問題は口にしない」が最も多かった。これは、相手の政治的立場を知らずに政治的・国際的な話をする、相手に悪い感情を持たれる可能性があるからであろう。

次に多かったのが「台湾と日本を比較して優劣の判断はしない」であっ

(5) これは、第2次世界大戦中に日本が原住民の若者を「高砂義勇隊」として東南アジアの戦場に送り込み、原住民に数多くの犠牲者を出したことや、日本人警官の高圧的原住民政策がセデック族の対日蜂起事件（1930年）の引き金になったことなどを踏まえて、漢族と原住民の対日観を分けて考えるべきという貴重なご意見であると思われる。

た。「日本独特の遠回しな言い方はせず、ストレートにものを言う」「外国人なので常に慎重な行動を心がける」「自分の言動で日本人すべてが判断されると、常に自覚する」「相手の面子を潰さない」「縁起の悪いプレゼントは送らない」、さらに「日本統治時代の影響がすべていい影響だけだったと思いたまないようにし、台湾人の親日感情に甘えすぎないようにしている」という回答もあった。台湾社会と台湾人を常に尊重して生きていこうという、回答者の配慮が感じられた。

IV 台湾での生活

(1) 厳しい規制や制限の下での生活

1980年代後半までの国民党政権下では、人口流出と中国共産党関係者の入国を防止するために厳格な出入国規制が敷かれ、国境を越えたモノの流れも厳しく監視されていた。

1983年に来台された方は当時の台湾について、次のように書いてくださった。

日本の本は自由に購入できず、本屋では「隠し部屋」みたいなお店で
お得意さんだけに隠れて販売していた。日本から送ってもらった本も検
閲されていた。個人の家庭から国際電話を掛けることが出来ず、電信局
まで行って申し込んで掛けていた。日本に帰国する際も保証人がいない
と再入国できないので、夫の叔父の公務員に保証人になってもらって
いた。台湾人も自由に海外旅行は出来ず、夫も（日本に）留学するときは
国民党に入党しなければならなかった。

当時、公務員など公職者の保証人を見つけられず、長い間帰国できなかった日本人配偶者も多かったようである。

戒厳令が解除された1987年に来台された方は、当時多くの台湾人が言論や集会の自由を求めて街頭でデモをしていた現場を見て、次のように

語ってくださった。

当時、台北市の仁愛路⁽⁶⁾辺りで何か大きなパレードをしていたことが印象に残っている。予備知識も何もなく来台したので、何かのお祝いかなと思っていた。今思い返せば、歴史が変わる瞬間を現地で体験していたのだと思う。

このように 2000 年以前に来台された方は、国民党の権威主義的な一党支配体制下の政治と経済発展、90 年代以降の急速な民主化と社会の変貌を、身をもって体験された。

そのため、「来台されたときのイメージは変わりましたか」という質問には、「変わった」58.9%、「変わらない」32.1%、「わからない」8.9%であった。2000 年以前に来台された方で「変わった」と回答された方は、「急速な経済発展によって豊かになる台湾を実感した」「政治体制が変化した」「地下鉄などのインフラが整備された」「衛生面が随分よくなった。以前はお店や駅のトイレが汚くて使えなかったが、今はとてもきれいになっている」「半導体では世界をリードし、政治も国民の声をよく聞く政治をしていて、民主的になった」という経済や政治、社会の大きな変化について言及された。言語面の変化に言及された方もいらっしやった。

現在 90 歳前後の日本統治時代を生きた年代は日本語もできるが、その息子の世代は国民党の教育方針で日本語はもちろん台湾語ですら下品だと禁止され、まともに話せない人が多くいる。外省人は中国語で統一したかったのだろう。でも言語は文化、言葉を失うことはその文化も失うということになりかねない。幸い最近、小学校では台湾語、客家語を授業で取り上げている。私が嫁いできたときの台湾と今の台湾は全く違う国のようなものである。

(6) 台北市の中央を走る幹線道路の 1 つ

この1983年来台の方の体験は、まさに言語から見た台湾現代史の変遷である。台湾語や客家語の復活は、民主的な新しい教育が模索されている証左であり、この方は国民党一党支配時代の権威主義的な統治からの決別を肌で感じていらっしやるのであろう。

国際結婚を取り巻く環境では、出入国及び移民法制定による永久居留制度の確立を始めとする新移民に関係する各法律が整備され、改正されて良くなった。

このように、外国人居留ビザや就労権に言及された方も少なからずいらっしやった。

それは、1990年代初頭までは台湾に居住する外国人のビザの種類が少なく、結婚して外国人配偶者ビザに切り替えても就労権がなく、外国人配偶者を雇う雇用者が「工作許可証」を申請しなければならなかったため、雇用者はその申請を面倒がって就業が困難だったからである。外国人配偶者が個人で「工作許可証」を申請できるようになったのは、2002年であった。

当時はまた、台湾に住む日本人には永住権も国籍取得権もなかった。特に国籍取得は複雑で、日本人が外国の国籍を取得する（帰化する）には「(日本の)原国籍喪失証明書」が必要なのだが、日本は1972年に台湾(中華民国)と国交を断絶たため、国家とみなさない「国」の国籍を取得するための「原国籍喪失証明書」は発行されず、日本人は台湾に帰化できなかった。そのため、配偶者が死亡した場合は台湾での居住権を失うという深刻な問題も抱えることになったのである。外国人配偶者の永住制度が法制化されたのは1995年である。

なお、国籍取得問題については、第V章（日台関係の今後のために必要なこと）で改めて述べる。

(2) 日常生活の苦勞

追加質問に答えてくださった方に「台湾での生活上の苦勞は何でしょうか」と尋ねたところ、「言葉の問題」という回答が来台の時期にかかわらず最も多かった。医師をなさっている方は、

台湾語はある程度の聞き取りは出来るようになってきたが、台湾語でまくしたてられると全くのお手上げ状態。患者さんの言っていることやニュアンスがつかみ切れているかどうか心配である。

20年以上台湾に滞在され、現在は工場で勤務されている方は、

社内で台湾語を使用することが多く、会議などでも普通に話されるので、台湾語がほとんどできない私にはつらいです。

と書いてくださった。台湾人の多くは日常では台湾語、仕事や公的な場では中国語（標準中国語）と2つの言語を使い分けるが、中国語を学んだ外国人であっても台湾語の習得はきわめて難しい。その苦勞とストレスは大変なものであろう。

「言葉の問題」に次いで多かった回答が、来台の時期に関係なく「義理の家族との関係や、子育てでの考え方の違い」であった。

- ・「義理の両親の言うことは絶対」で、土日に突然の呼び出しがかかっても必ずすぐに行かなければならないのが嫌だった。
- ・予告なしに義理の父母やきょうだいがいきなり我が家にやって来る（のが困った）。
- ・生まれたばかりの子どもを朝から晩まで義理の両親の家に連れていかれて、精神的につらかった。
- ・子育ての面で台湾の習慣が全くわからず、出産後にしてはならないこと、食べ物のことなどで、周りの親戚からの理解できないアドバイス

を適当にうけながすのが大変だった。

- ・台湾では子どもを叩いたり脅したりして躰けるのが当たり前で、戸惑った。

台湾では伝統的な「親孝行」の考え方が未だに強く、子どもは親の言うことを聞き、年老いた親の面倒を見るのは子ども（特に息子）の責任と考えられている。祖父母、父母、未婚の子という三世代同居率は2010年で11.0%、高齢者と親族（配偶者、子ども、親戚など）の同居率が88.1%⁽⁷⁾と驚くほど高いことがそれを示している。日本の三世代同居率は3.6%⁽⁸⁾で、配偶者、子どもあるいは孫と暮らす（親戚は含まない）高齢者は26.8%⁽⁹⁾である。伝統的な「親孝行」の考え方が根強いいため、台湾では子育てもまた親世代の考えとやり方が支配的だと思われる。核家族に慣れた多くの日本人女性にとって、戸惑いの連続だったと想像される。

V 日本が台湾から学ぶこと

「來台されたときのイメージは変わりましたか」という問いに対して、「変わった」と回答された方のなかで、「台湾には日本よりも優れた点がある」という回答が特に最近來台された方に目立った。

コロナ対策然り、医療も教育も日本よりずっと安価でしっかりしていると思う。

(7) 行政院主計總處『社會指標統計表』（2013年）。

(8) これは2015年の数字。日本総務省統計局（2015年）『平成27年度国勢調査一世帯構造等基本集計結果』<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2015/kekka/kihon3/pdf/gaiyou.pdf>（2020年8月1日参照）

(9) 内閣府（2013）『平成25年度版高齢社会白書』<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitpaper/w-2013/gaiyou/index.html#container>（2015年2月5日参照）

とアンケートに書いてくださった方（2018 年来台）に具体的な内容を追加質問でうかがうと、「街の診療所は夜も 9 時過ぎまで営業してくれていることが多いので、時間に余裕がある」「コロナが蔓延したときには学校が一斉に登校不可になったが、翌日からオンライン授業が始まるなど対応が早く、授業を止めるなどという意気込みを感じた」と答えてくださった。確かに都市部の診療所は夜 8 時や 9 時まで開いているため、仕事帰りの人にとってはとてもありがたいだろう。

また、台湾は 2003 年の重症急性呼吸器症候群（SARS）発生の際に世界保健機関から情報提供などの協力を得ることが出来なかったため、院内感染した病院を予告なく封鎖するなどの大混乱があり、84 名もの死者を出した。その教訓を活かして感染対策の法整備や学校教育のオンライン化の準備を一気に進めた。今回の新型コロナウイルスへの対応では、2019 年 1 月という早い段階から水際対策を徹底させるなどして効果的にウイルスを封じ込め、また情報を徹底的に開示して国民の理解を得ながら対策を進めるという民主的な手法が世界の称賛を浴びている⁽¹⁰⁾。

行政システムや街中の *Wi-Fi* 環境など日本よりはるかに進んだ部分があり、見習うべきところがたくさんある。30 代半ばのオードリー・タン氏を国政のリードメンバーにする決断からして、素晴らしいと思った。

オードリー・タン（唐鳳）デジタル担当政務委員（大臣）は「マスク在庫マップアプリ」を開発したことで知られる 1981 年生れの天才プログラマーで、35 歳の若さで入閣した。行政システムのデジタル化や民主主義を損なうフェイクニュースの防止技術開発に取り組んでいる。また、

多様性への寛容さがすごいと感じている。X ジェンダーや *LGBT*、ベ

(10) 野嶋（2020）。

ジタリアンもまた周りの人にありのままに受け入れられている土壌があるのも素晴らしいと思う。寛容さと弱者に対する優しさのある国という印象が強くなった。

台湾では2019年5月にアジア初となる同性婚を認める特別法が成立し、同性のカップルにも異性カップル同様の婚姻の権利が認められ、税金控除や扶養義務なども異性カップル同様の規定が適用されることになった。2020年末までに全婚姻件数の2.2%にあたる5326組の同性カップルが結婚した。同性婚（台湾では婚姻平等と呼ばれる）の実現は戒厳令解除後の様々な市民運動の成果であるとともに、政権が台湾の民主化を世界にアピールするために性的マイノリティの人権擁護と法的権利の拡大を後押ししたからでもあった⁽¹¹⁾。一方、日本では数多くの自治体が同性パートナーシップ制度を導入しているが、国が定めている法律ではないために法的拘束力を期待することができず、自治体の「サービス」でしかない。台湾との大きな格差がここにもある。なお、オードリー・タン氏はトランスジェンダーで、トランスジェンダーの人物が閣僚に任命されたのは世界で初めてのことであった。

日本が台湾から学ぶことはたくさんあるようだ。

VI おわりに—今後の日台関係のために必要なこと

(1) 訪台する日本人に望むこと

「近年、台湾に親近感を抱く日本人が増え、2018年と19年の日本人の人気海外旅行先の第一位は台湾でした。台湾を訪れる日本人に望むことはありますか」という質問に対しては、「ある」54.7%、「ない」27.7%、「わからない」17.9%で、「ある」という回答の圧倒的多数は「台湾の歴史や台湾社会の多様をもっと知って欲しい」という要望であった。

(11) 田村（2022）：99-101.

- ・台湾の歴史、特に日本統治時代以降の歴史を学んでから来て欲しい。
- ・今の台湾の民主主義はどれだけの方の命が奪われた上で成り立っているのか、また、日本が台湾を統治していた事実も忘れてはならない。
- ・台湾の食べ物やグッズだけではなく、日本統治時代に建てられた日本風建築物や台湾に残された日本文化にも興味を持ってほしい。
- ・日本語世代の方々のことを知り、交流して欲しい。
- ・「台湾人＝親日」ではなく、日本に反感を抱く台湾人も存在することを忘れないで欲しい。

「台湾人は親日である」と言われ、実際に本アンケートでもそれが裏付けられている。しかしながら、訪台する日本人の多くが台湾の近現代史に無知でありつづけるなら、台湾人の親日は変わるかもしれないと、回答してくださった方は危惧しているのであろう。日本の若者が学校教育で台湾の近現代史を学ぶのはもちろんのこと、例えば台湾に赴任する日系企業の駐在員とその家族が事前研修として日台関係の歴史を学ぶことは、今後の日台関係のために必要なことであろう。

次に多かった要望は訪台する日本人のマナーに関するものだった。

- ・台湾人を見下して、横柄で傲慢な態度を取るのは止めて欲しい。
- ・台湾では日本語が通じるからと考えて、中国語を話すそぶりもない人がよくいる。せめて挨拶などの簡単な中国語を覚えてから来て欲しい。
- ・買春希望の日本人客が少なからずいて、女性を紹介するお店を教えるて欲しいと言われる。
- ・ある日本人男性が複数の女の子とセックスするのを目的に訪台し、それをブログに細かく書いているのを見つけて気分が悪くなった。同じことを日本でするのはなく、アジアの別の国の女の子に特化

して行うという自分の動機や深層心理にちゃんと向き合って欲しい。

- ・夜市や空港でどんちゃん騒ぎをする日本人を見かけたことがある。台湾のルールとマナーを守って欲しい。

欧米を旅行した日本人が欧米人を見下したり、市場や空港でどんちゃん騒ぎをしたなどという話は、管見の限りでは聞いたことがない。「日本は欧米よりは下位だが台湾よりは上位だから、このような行為は許されるとでも思っているのだろうか。このような日本人を「親日」台湾人はどう見ているのだろうか」という疑問を持つ回答者は多かったようである。

「ヨーロッパでも隣国とは友好的であることは難しいと聞く。近くに良好な関係を築ける国があることは大変貴重なことと思います。この関係を今後とも大切にして欲しいと思っています」と追加質問に書いてくださった方の言葉が心にしみる。

(2) 二重国籍の保持

「ご自身が抱える居留問題（帰化、仕事、子どもの国籍・教育・留学・結婚など）があれば教えてください」という質問に対しては 80 名の方が回答くださり、「自身あるいは子どもの国籍」が 20 名と最も多く、次いで「老後の住む場所、介護」13 名、「帰化」12 名、「子どもの教育・進学」11 名であった。

日本も中華民国（台湾）も国籍については親の国籍を子が受け継ぐという血統主義を取る。すでに述べたように、日本人が外国の国籍を取得する（帰化する）には「（日本の）原国籍喪失証明書」が必要なのだが、日本は 1972 年に台湾（中華民国）と国交を断絶したため、国家とみなさない「国」の国籍を取得するための「原国籍喪失証明書」は発行されず、日本人は台湾に帰化出来ない。そのため、配偶者が死亡した場合は台湾での居住権を失うという深刻な問題も抱えることになった。日本人配偶

者の地位と国籍に関する不安定な状況が改善されたのは2000年に「中華民国国籍法」が大きく改定されてからで、これによって「原国籍喪失証明書」の取得が本国法によって出来ない者は、「国籍喪失届／離脱届不受理証明書」を日本で発行してもらえば、日本国籍を保持したままで帰化することが出来るようになった⁽¹²⁾。

したがって、台湾で帰化された方は日本と中華民国の二重国籍保持者となる。台湾での生活が長くなるにつれて、帰化して中華民国国籍を取得する日本人が増えているのは、日本国籍を保持したままでもよいという安心感も大きな理由になっていると考えられている⁽¹³⁾。また、日台ハーフの子どもは日本国籍を持つことができるので、子どもも二重国籍保持者、あるいは台湾人と日本人のカップルの子どもが出生地主義を取るアメリカで生まれた場合には、三重国籍保持者となる。

もともと日本の国籍法では二重・三重国籍は禁止され、両親の国籍を受け継いだ子どもは22歳の誕生日までにどれかを選択しなければならない。ただ、国籍法は「日本国籍を選択した後に外国国籍の離脱の努力」を求めているが、もう1つ（あるいは2つ）の国籍を捨てたかどうかは、本人が語らない限り第三者にはわからない。世界には二重国籍あるいは三重国籍を認める国も多く、アメリカも二重国籍を認めている。そのため、日本政府は二重国籍保持者を事実上容認するという現実的な対応を取っている⁽¹⁴⁾。

ではなぜ「**ご自身が抱える居留問題があればお教えてください**」という質問に対して、「自身あるいは子どもの国籍」という回答が多かったのか。それは、まず、「国籍は1つであるべきで、二重国籍者はずるい」「二重国籍保持は違法」というような先入観あるいは偏見、間違った認識が日本社会に根強くあるためである。これは日本政府が二重国籍保持を事実上

(12) 居留問題を考える会「帰化（国籍取得）」<https://sites.google.com/site/kyorumondai/home/kika>（2022年3月2日参照）

(13) 大成権（2019）：81.

(14) 野澤（2019）：18.

容認しているにもかかわらず、それを明確にしていなかったことに起因する。2016年9月に起きた蓮舫（立憲民主党所属の参議院議員）氏の二重国籍問題での一部メディアや世論の蓮舫氏バッシングは、二重国籍に対する日本社会の先入観と偏見、間違った認識を露わにした⁽¹⁵⁾。この一連のバッシングによって「居留問題を考える会」の大成権代表は「二重国籍はなぜいけないのだろうか」という疑問を持ち、多くの会員も「二重国籍者がまるで犯罪者扱いされているのを見て、憤慨した」という意見を寄せてくれたそうである⁽¹⁶⁾。あたかも二重国籍者を排除するような意見が噴出したことは、日台国際結婚家族だけでなく、世界あちこちの国際結婚家族に大きな不安を与えたことだろう。

2021年9月24日、日本弁護士連合会は日本国籍と台湾籍を有する者（日台複数籍者）の国籍法上の国籍選択手続きに関して、内閣総理大臣・法務大臣宛てに以下の2点の勧告を行った⁽¹⁷⁾。

- ① 台湾籍を選択する方法が認められておらず、日本国籍の選択宣言を行うことしか認められていない日台複数籍者に対して、国籍法14条が規定する国籍選択を求めてはならない。
- ② 日台複数籍者に対して、日本国籍の選択宣言を行わなかったとしても、国籍法上の義務違反に当たらないことを周知徹底するべきである。

日本政府は台湾に長期滞在する日本人が安心して暮らせるよう、この勧告を真摯に受けとめるべきであろう。

本アンケートの最後の質問「永住あるいは国籍取得（帰化）をお考えですか」に対して、「考えている、あるいはすでに帰化した」が50.9%、「わからない」33%、「考えていない」16.1%であった。グローバル化の

(15) 野澤（2019）：24-50.

(16) 大成権（2019）：74-75.

(17) 日本弁護士連合会「日台複数籍者の国籍選択に関する人権救済申し立て事件（勧告）」<https://www.nichibenren.or.jp/document/complaint/year/2021/210924.html>（2022年3月1日参照）

下で国際結婚を含めて国境を超えた人の移動が進む中、日本は従来の国籍法そのものを見直して二重・三重国籍の保持に向けた議論を開始すべきではないだろうか。もし日本が重国籍を認める方向に進むなら、安心して中華民国の国籍取得をする方が増えるに違いない。

【引用・参考文献一覧】

【日本語】

浅野和生編（2017）『日台関係を繋いだ台湾の人々』展転社。

五十嵐真子・三尾裕子（2006）『戦後台湾における〈日本〉：植民地経験の連続・変貌・利用』風響社。

及川明子他（1999）『おどろ気ももの木台湾日記』毎日新聞社。

外務省領事局政策課『2021 年在留邦人数統計調査』

<https://view.officeapps.live.com/op/view.aspx?src=https%3A%2F%2Fwww.mofa.go.jp%2Fmofaj%2Ffiles%2F100293778.xlsx&wdOrigin=BROWSELINK>（2022年2月10日参照）

居留問題を考える会「会の案内」

<https://sites.google.com/site/kyorumondai/home/annai>（2022年2月10日参照）

居留問題を考える会「帰化（国籍取得）」

<https://sites.google.com/site/kyorumondai/home/kika>（2022年3月2日参照）

呉修竹（何義麟編）（2018）『在日台湾人の戦後史：呉修竹回想録』彩流社。

下山操子（柳本通彦編訳）（1999）『故国はるか：台湾霧社に残された日本人』草風館。

内閣府（2013）『平成25年度版高齢社会白書』<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitpaper/w-2013/gaiyou/index.html#container>（2015年2月5日参照）

日本総務省統計局（2015年）『平成27年度国勢調査：世帯構造等基本集計結果』<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2015/kekka/kihon3/pdf/gaiyou.pdf>（2020年8月1日参照）

日本弁護士連合会「日台複数国籍者の国籍選択に関する人権救済申し立て事件（勧告）」

<https://www.nichibenren.or.jp/document/complaint/year/2021/210924.html>
（2022年3月1日参照）

野嶋剛（2019）「大阪なおみ選手が直面する国籍問題」国籍問題研究会編『二重国籍と日本』ちくま新書。

野嶋剛（2020）『台湾はなぜ新型コロナウイルスを防げたのか』扶桑社（新書）。

台北市政府（2018）『外国人ガイドブック』台北市政府。

台湾現代史のなかの日本人（田村）

- 大成権真弓（2013）「台湾における結婚移住女性とその家族に対する政策」中島和夫監修／尹靖水・近藤理恵編『グローバル時代における結婚移住女性とその家族の国際比較研究』学術出版会。
- 大成権真弓（2019）「国際結婚と国籍」国籍問題研究会編『二重国籍と日本』ちくま新書。
- 竹下修子（2004）『国際結婚の諸相』学文社。
- 竹中信子（2001）『植民地台湾の日本女性生活史（昭和篇下）』田畑書店。
- 田村慶子（2022）「重い家庭の負担からの逃避：台湾の家族と女性」田村慶子・佐野麻由子編『変動するアジアの家族：シンガポール、台湾、ネパール、スリランカの現場から』明石書店。
- 本間美穂（1999）『海を越えたなでた：ひとりひとりの国際結婚』日僑通訳出版社。
- 三浦典子編（2010）『台湾の高齢化と社会意識』溪水社。
- 宮本孝（1997）『玉蘭荘の金曜日：台湾に生きる日本人妻たちの戦後 50 年』展転社。
- 若林正文（2008）『台湾の政治 中華民国台湾化の戦後史』東京大学出版会

【中国語】

- 陳華主編（2014）『台灣婦女處境白書』女書文化事業有限公司。
- 陳世昌（2015）『戦後 70 年臺灣史 1945～2015』時報出版。
- 蕭新煌・林國明編（2000）『台湾的社會福利運動』巨流圖書公司出版。
- 行政院主計總處（2013）『社會指標統計表』。

《資料》 在台湾日本人の意識、生活、居留問題に関するアンケート

台湾在住日本人のみなさま

【調査の趣旨とご協力をお願い】

2021年8月2日

私は北九州市立大学法学部に勤務する田村慶子（たむらけいこ）と申します。2019年4月～7月の3か月間、台北の中央研究院台湾史研究所に客員研究員として在籍し、台北に滞在しておりました。

その折に、居留問題を考える会主催「2019年度台北座談会」（2019年5月26日開催）に参加させていただく機会があり、台湾に暮らす日本人の方々が抱える各種の居留問題について、貴重なお話を聞かせていただきました。そして、その座談会が刺激となり、台湾に長期滞在する日本人のライフヒストリーから見る日本・台湾交流史、社会史を研究したいと考え、今年4月に学内の研究資金を得て「台湾現代史のなかの日本人—台湾に長期滞在する日本人への聞き取り調査から—」という研究を立ち上げました。

本来なら、在台日本人の方々に直接お目にかかってお話をうかがうつもりだったのですが、新型コロナウイルス感染拡大のため、訪台することが叶わなくなりました。

それで次ページのようなアンケートを作成しました。お忙しい中恐縮ですが、ご協力いただければ幸甚です。アンケートには個人が特定できる項目はございません。また、研究目的以外にアンケートの結果を使用することはありません。アンケートへのご協力をよろしくお願いいたします。

アンケートには個人が特定できる項目はございませんが、後日、補足調査のためにご連絡させていただいても構わない方は、メールアドレスとお名前をご記入ください。補足調査で質問させていただくこと以外に、メー

メールアドレスやお名前を公表することはありません。また、皆様のご回答は個人情報保護のもと、公開や転送などは致しません。

田村 慶子

〒 802-8577

福岡県北九州市小倉南区北方 4-2-1

北九州市立大学法学部

《アンケート》

補足調査のため、メールアドレスとお名前をお書きいただける方はご記入をお願いいたします。

該当する□に✓をいれてください。理由などを具体的にご記入いただければ幸いです。

1 ご自身の性別と年齢をお教えてください。

女 男 その他

20～29 歳 30～39 歳 40～49 歳 50～59 歳

60～70 歳 70 歳以上

2 いつ台湾に来られましたか？

(西暦) 年 月

3 来台された動機は何ですか？

4 現在お持ちのビザの種類をお教えてください

5 来台が決まった時はどのようなお気持ちでしたか？

とても嬉しかった 理由：

- 何とも思わなかった
 - あまり行きたくなかった 理由：
- 6 日本のご両親やご親族は來台に賛成されましたか？
- 賛成した
 - あまり賛成ではないが、仕方ないので承諾した
 - 反対した 理由：
- 7 來台前は台湾にどのようなイメージを持っていましたか？
- 8 そのイメージは來台後に変わりましたか？
- 変わらない
 - 変わった 理由：
 - わからない
- 9 仕事や生活で親しい台湾人はいますか？
- 多くいる
 - あまりいない
 - ほとんどない 理由：

- 10 仕事や生活で台湾人と接するうえで、気を付けていることはありますか？
- ない
 - ある 具体的にご記入ください
 - わからない
- 11 あなたの周囲の台湾人は日本に対して良い感情を持っていると思いますか？
- 持っている 具体的にどのようなときにそう感じましたか？
 - 持っていない 具体的にどのようなときにそう感じましたか？
 - わからない
- 12 台湾で日本人だからという理由で、いやな思いをしたことがありますか？
- ある 具体的にどんな事でしたか？
 - ない
 - わからない
- 13 近年、台湾に親近感を抱く日本人が増え、2018年と19年の日本人の人気海外旅行先の第一位は台湾でした。台湾を訪れる日本人に望むことはありますか？
- ある 具体的にお書きください。

ない

わからない

14 ご自身が抱える居留問題（帰化、仕事、子どもの国籍・教育・留学・結婚など）があればお教えてください。

15 永住あるいは国籍取得（帰化）をお考えですか？

考えている、あるいは永住を決めている

理由：

考えてない

Reprinted from

KITAKYUSHU SHIRITSU DAIGAKU HOU-SEI RONSHU

Journal of Law and Political Science. Vol. L No. 1/2

October 2022

**Japanese in the Modern History of Taiwan: Voices of long-term
Japanese residents in Taiwan**

TAMURA-Tsuji Keiko